

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	お嬢さん : 創作
Author(s)	松井, 武州
Citation	龍南, 2 2 9 : 7 3 - 1 0 0
Issue date	1934-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7226
Right	

お嬢さん

松 井 武 州

1

熱い味噌汁に春太根の淺漬、之に落の佃煮を取合せた軽い朝餉だから後片付とても手間は掛らない。花時も過ぎた今日此頃、皐月晴の陽光が水々しく採光窓から水屋に流込んで居るので水も柔らかだ。濡手を拭ふ布巾の跡もほんのり紅なして、細い指先迄ぼつと暖まる。涼子は左掌を冷たい頬に押當て押當て、指先から微妙な快味を汲取り乍らその恍惚境に生々した強い力が、恰も深い地底から噴出す泉の様に湧出て來るのに我を忘れて居た。しかも、一方空いた手には拭上げたばかりの九谷焼の茶碗を乗せた儘、頭の隅の方では今更の如く此の茶碗との永い年月を取止めもなく想つて居た。

此の茶碗。——と言つてもわざ／＼別誂へしたものでもない。未だ尋常二、三年頃、或陶物屋の店先でねだつたのを、陶器道樂の父が面白がつて求めて呉れて以來今年で約十年間、三度の食事に缺いた事のない代物なのだ。餘程の焼だと思えて未だに色澤も昔乍らで、その上年數の品さへ加つて居る。朱に金を絡ませた散らし紅葉の華手な焼だから、なまじつかな人が手にすると氣壓されて仕舞ふのだが、それが涼子の手に乗ると流石にびつたり落着いて少しも目立たない。しかも妙なことには洋装——特に濃緑のドレスの儘で、此の茶碗を持つと強い不調和の中に不思議な魅力さへ湧出て、日頃皮肉許り吐く徹さへ心から賞めた事もある。

當初こそ大きな茶碗を大口で……等と笑はれたものだが、女學校も卒業して居る今日では少々小さ過ぎないでもない。とあれ手馴れた器ではあるし、數々の想出のまつはる、謂はば半生の記念物としても今更手離すのは惜しかつた。其の上、此華美な朱色にも年數の故か何處ともなくうらぶれに似た一脈の沈鬱さが現はれて居て、それが丁度家庭の現狀にも似て居るので、從來とは又別種の愛着さへ起つて來るのであつた。祖父の代から受繼いだ若干の財産を殖すでも、失ふでもなく、早くして實業界の煩雜を脱れ、唯一途に陶器趣味に生きて居る父は今も支那旅行の途中であるし、一方母の春枝は長唄に癡るかと思へば洋畫會にも入會するなど言ふ多角形な趣味の女で差障りのない程度の金と時間を享樂のために空費して居る。

平穩な家庭と言へばそれ迄の事だが、生活に無氣力な兩親の獨り娘として毎日々々を同じ様に、これと言ふ目的もなく暮すのはうら若い涼子にとつては相當な苦痛であつた。幼い頃こそ父と共に、母と共に此の安易な生活が無邪氣に送つて居たのだが女學校卒業以來一年間の無聊な生活中、或は讀書に、或は高校文科二年、生意氣盛りの徹の説に、著しく批判的な考へを懷く様になつて居た。

金と時間に飽和した揚句享樂を求めて徒らな死を待つ。無意味な肉体の消滅を待つ爲めの生活。日頃誇らしく春枝が口にする社會奉仕だの、慈善だのも要するに有閑マダムの體裁の良い享樂——死を待つための享樂に過ぎず、「生」への執着力の散漫な現れなのだと思ふと現在のこんな生活は無意味なものに考へられて、果ては不眞面目だとさへ結論される。之に對して何時ぞや徹が皮肉つた言葉を涼子は未だに忘れはしない。

「だがさ、一文も稼げない、又稼ぐ必要もない人はもう少し圖々しく生きて行き給へよ。自身さへ食へないで躍起になつて居る人の多いこの世間にさ、道樂で割込まうつてのは殘忍極まるぢやないか。君にしろ、僕にしろさ、どんなに焦つてもこれ以上金持になれるわけぢやなし、と言つてこれ以下の生活は眞平御免だし、まあ／＼プテブルつてお方々はぢいつと我慢して現狀維持に努めるんだね。」

勿論涼子は満足しなかつた。加之、こんな皮肉を吐く徹も亦自分同様の境遇にあつて、同じ様な不安を持つて生きて居るのだと思ふと、益々現在のこんな生活に對する自信が薄くなつて行くのであつた。かうした無方針の生活にあつては生花、茶湯も疎ましく、果ては不安の感情に禍ひされて讀書すらも渉らなくなつた。唯、漠然と讀み、考へるだけでは何の發展も期待出来ないだらうと思ふと苦しかつた。

かといふ涼子であつたから自然春枝とそりが合はなくなるのも當然で最近の家庭生活は一段沈鬱なものとなつて居た。古雅な趣味とは言條、陶器を求めて殆んど一年中旅から旅に自適して居る父が恨めしかつた。それにも増して社交に目を送る春枝の心情が恨めしいのだ。目的も無く唯社交のための社交には高價な享樂しかあるまいに、母一人、子一人の今の家庭を少しでも考へたら……………と幾度も悔んで見るのであるが、つい腹立しさが先立つて到底穩かに切出すべくもなかつた。もつともこれは兩人の生活に對する考への相違と言ふ根本問題は別としても、強ち春枝の罪とは言へない。

元來一人娘で意地張屋の涼子は自分の周圍の者は誰彼となく完全に自分の愛情の圈内に繋止め、それから一步たりとも出したくないと言ふ厄介な性質を持つて居る。勿論甘つたれから來た性質なのだが年と共に甘つたれると言ふよりも他人に甘つたれて貰ふ一方内心秘かにその人に甘つたれて見たい氣持が強くなつて來たのである。然も、此の性質を無視したり、折角投與へた愛情の霸絆から脱れんとする者に對しては他人では殆ど想像も及ばぬ程の憎惡を以つて對するのであつた。春枝に對しての不満の一部もここに在るのだ。これに自身氣付ぬでもないのだが、二十年來培はれて來た此の性質は案外根強くつて匡正しようとする程狂ほしく昂まるので遂には秘かにそれを樂しむ様にさへなつて居た。だから女學校時代も仲の好い五人を組んで「白バラの束」等好みの名を付けて自らその女王の如く振舞つて満足して居たのである。

然し乍ら卒業以來僅一年、一人、一人と三人迄嫁ぎ桂子と唯二人つきりになつた今日、犇々と胸に迫つて來るのは嚴かな無形の規律であつた。甘い友情も、清淨な昂奮も、獨勝手な強情も力強く押流して行く現實の荒波であつた。繊細な乙

女の胸と胸に交はされて來た愛欲の幻想が脆くも崩れて行くのを、冷然と眺めようと思ひ乍らも先立つのは偏狹な求愛に因する狂亂であつた。無論嫁ぎゆく友の後姿には常人以上の寂しさと、大きな憤りを感じたのだが最も親しい桂子が残つて居るのはせめてもの慰めてあつた。以來前にも増して桂子に傾倒して仕舞つた。桂子の一舉一動に自分の愛情の片鱗が映出されるのを鋭く觀取しながら安堵と共に言難い悦びを覺えるのであつた。感極つた揚句、屢々桂子を強く抱擁する事さへあつた。そんな時にはきつと桂子もしつかり抱擁して呉れる、それを待期して一層強く抱き締め乍ら、涼子は一言もきけなかつた。いつも受動的な桂子がいとしくつてならなかつた。然し、いつも能動的な自分が寂しかつた。熱い抱擁の最中で、涼子は嚴かな無形の規律を畏怖れた。押寄せて止まぬ現實の波に激しい戰を挑んだ。

もとよりこんな子供臭い感傷が、單に自分の強情のみで守り通せるとは思はぬ涼子なのだが、さて桂子にも縁談が起つて來たとなると流石に居たたまれぬ氣持になるのであつた。薄弱な力しか持たぬ自分の愛情に殆ど惡罵に近いものを投付け乍らも、尙異常な愛欲の幻想を追求め、繫止めんとする絶望の幾日かが過ぎ行く中に、涼子は怖しい惡企みを無意識に胸中に藏めて居た。

先づ桂子に代つて、今は京都帝大工學部二年に在學中の三郎に、桂子の縁談の事情及桂子の三郎に對する昔乍らの戀情を申送つた。勿論今迄とても二人の間柄を萬更知らぬ涼子ではなかつたが、とあれ二人の望みが達せられる等とは到底考へられないのだ。二人の家庭は貧しかつた。互に愛し合ひ乍ら楽しい未來を斷念して居る二人なのだ。タイピストをやつて居る桂子。食ふために勉強して居る三郎。食ふため、生存への激しい争ひに打勝つために孜々としてその日を送る二人の力に満ちた靜寂な戀。斷念した戀。二人の苦しい心の中を知らない涼子ではなかつた。然し今の涼子にとつて桂子を奪はれるのは狂ほしかつた。たとへ良心の苛責はあつたにしろ三郎を利用してこの縁談を破壊したかつた。涼子は思切つて桂子を唆かした。

「そりやあ、貴女とは永久の愛人でありたい私なの。何時迄も二人して生きて行きたいの。でも世の中、憎らしい世の

中つてものが許さないんですもの。貴女の私よ。貴女の結婚を恨むなんて氣はないわよ。でもお嫌ひな人となんて。嫌な男に嫁ぐ、なあって私憤つちやふわ。せめて心から慕ひ慕はれてる方、三郎さんとの未來を祈りたい私よ。分つて？これは青春の道德なんですもの。私どんな力でもお貸してよ。」

「私も、私だつて考へないことぢやあ——そればかりを考へてる此頃だわ。でも、三郎さんはまだ二年だし、今すぐつて追つてゐるこの問題の解決にはならない考へだわ。どうにもならないからこそお互に斷念してゐる私達、涼子さん、貴女にはよく分らないことだけとお金なの。お金にはなまじつかな力ぢやあかなひつこないわ。自分で働いて見て分つたの。でも私、かうして働いてゐるでせう。自分一人分は稼いでゐるのよ。やつちやはうかしら。家から飛出しちやへば。——一年頑張れば三郎さんも働いて呉れるわね。冒險よ。それをやらなくつちや嫌な結婚だ。相手の男つて奴、大嫌な奴。是非結婚しなくつちやならないらしい事情なの。やつちやはうかしら。」

涼子は北叟笑みながら更に三郎との戀愛結婚を主張した。繰返し、繰返し、貴女達の成功を祈ると讚美して居る中に最初到底覺束無いものと決めて居たこの無謀な戀愛結婚さへも直ちに成功するかもしれぬと信じ込む程眞剣な氣持になり、果ては最初の企み等忘れて仕舞ひさうになる。すると三郎に對して奇妙な嫉妬さへ起つて来る。眞情が迫つて来る。涼子は涙を滲ませ乍ら桂子の未來を祝福したり、恨み言を言つたりした。恰も叛き行く戀人を口説く様な甘い悲しみに浸るであつた。

その中に三郎から返事が來て、桂子の心は全く縁談に反對と決つて仕舞ひ、何程もなく家出の決心をつけてしまつた。涼子は二人を完全に自分の掌上に踊らせ乍ら、一日も早く二人の間が破れるのを望み始めて居る自分の心を怖れた。とは言へそれは一つの悦びでもあつたのだ。再び幻想の愛欲の世界を樂む日を夢見た。然し最早普通の甘い清淨さがある筈はない。悦びの裏には苦責があつた。不安と羨望があつた。自分自身に對する不満があつた。だが悦びなのだ。悦びと言ふよりもむしろ愛する桂子を力の續く限り手離すまいとする狂ほしい熱情なのだ。勿論心の裏では到底二人の間は成功

しないと言ふ豫測をつけて居て、それを破つたり、或は二人に心からなる同情を寄せたりして居るのだがいづれにせよ涼子は家出に對しては桂子以上の夢想を懷いて居た。凄慘な愛欲の幻影を追つて居た。この世界では三郎こそ八裂きにしても飽足らぬ戀敵であり、桂子さへも叛逆者であつた。しかも機會ある毎に二人から心からなる感謝を捧げられるのだ。涼子の心は幾度も鈍つた。二人の純情の前には幾度か屈服しさうになるのだがそれでも最後迄自分の愛情を貫きたかつた。桂子との熱い抱擁の一瞬を守りたかつた。

母一人、子一人の此頃の家庭にあつて、母娘らしい愛情を交換し得ぬ陰鬱さを想ひ、それを氣付いても居ないし、たとへ氣付いても左程苦しみさうにない春枝を考へ、最後に桂子の出奔に心を向けると堪へ切れぬ淋しさは、むしろ恐怖となつて来る。涼子は頭の中に悠然と沈んで消えぬ「家出」の二字を畏れ乍らも、魅せられた様にちいつと見詰めて暮して居た。

それにつけても此頃の不安な生活にあつて空虚な家庭、何となく薄弱な自分の存在と言ふものを考へると妙に身体中が冷えて来る。まるで此の茶碗の肌理の様な私の生活だ、と思ひ乍ら、涼子はまじく華美な、しかし沈鬱な茶碗の艶に跳入つて居た。

2

「涼子さあん。何してらつしやるのよう。」

「はあい。只今。」

「後片付けなんぞお藤にまかして早くいらつしやいつたら。少々お話がありますから。」

「只今あ。」

と口だけは好い返事。ふんと鼻を鳴して、肩をすばめた涼子。それをにやりと盗見た女中のお藤。威厳をつくつてちよ

とお藤を見返ると、涼子は糞丁寧な茶碗を棚に伏せて化粧部屋に入つた。

「なあに、母様、又お出掛けになるのね。」

「ええ、ええ、暫くは滿洲事變の慰問準備で婦人會も敷入りなの。忙しいつたら。」

「慰問だつて、忙しいつて、いゝわね。有閑マダムの素晴らしいおママゴトなこと。」

「何ですつて。まあ。この人と言ふ人は。」

と、鏡の中からはい顔。目だけは笑つて居る春枝の仕草は妙に若やいで居て嘔氣を催す程不自然だ。

些細な事にも相手が春枝だとなると妙にひねくれて仕舞ふ自分が恨めしかつた。哀れに思へた。とあれ不快な氣持は抑へることも出來ず、涼子はそつと坐り乍ら、

「例のお話なんですけれどね。」

と、鏡から離れて坐り直す春枝をまるで變心した戀人の阿諛でも聞く様な氣持で見守つた。

「そこは若い御當人達の氣持を尊重して一先づ御交際だけでもつてことに、つて先方もこんな風に仰言つてるんでせう私もそれは大賛成つてわけでお引受したんでせう。」

「交際だけなんて凡そ無意味な言葉だわ。表から考へても裏から考へても。」

「とにかく一度逢つて御覽なさいな。そりやあそつのない坊つちやんなんですからさ。でなきあ母様も引込みがつかない筋なのよ。」

「母様の御一存で引受けなすつた事なら何も私迄引摺出して御斷りするわけがありませんことよ。私、母様の仰言る

『交際』つてことが分りませんわ。」

「だつて貴女もさうく女學生式ぢやあいいけない頃なんですよ。」

「結婚なんぞ考へたこともないわ。それは昨夜も申上げた筈なのに。若くつて、お金も、頭もあつて、私の養子になら

うなんて、随分お人好しの方ね、そのない若い方となんぞ友達づきあひも御免だわ。」

「何もそんな事を仰言つたわけやありませんつたら涼子さん。さう／＼理屈張るにはあたらないことでせう。」

「ぢやあ母様方で御勝手にお定めになつたのね。お茶飲話の噂からとび出した位のことなんだわ。」

「なんですつて、言葉が過ぎやあしくつて。」

「私を何と存じてらつしやいます。」

「あゝら、あら、困つたお嬢さんねえ。」

「存じません。」

「ね、ん、え、ちゃんつたら仕様がなほんたうに。もう二十才^{ハダチ}つてのにねえ。」

と、再び鏡臺に向ひ乍ら、

「むらさきにほへるいもつて頭がいゝのよ。二十三にも四にもなつてなまじ臺がたつよりはね。」

と、化粧を始める春枝の老巧な口振りに氣壓されて、涼子は呆然と立上つた。

憤らうか、拗ねようか、それとも此の儘引取らうかと躊躇ひ乍ら扉の把手をかり／＼鳴して居る中に重苦しい雰圍氣がひた／＼と迫つて来る。

「母様でも娘時代があつてよ。殿方が妙に嫌な時もね。」

と、自らを愛しむ様な、嘲る様な低い聲を洩して、春枝は一入念入りに鏡臺を覗込んだ。甘い清淨な幻想をむざ／＼と醜い現實に陥入れる様なその獨り言に、涼子は息詰る程の氣まづさを感じて、横目使ひに豐滿な春枝の背中に目を落して居た。

むつちりした腕の肉。なだらかな肩に深い抜衣紋。背筋から下半身に流れて居る玄妙な曲線。

母であることも忘れて涼子はその美しさに見惚れて居た。何と言ふ怖しい様な魅力だらう。私にはきつとあの半分もあ

の美しさはないだらう。姥櫻の美。美しい獸。激しい情痴の美だ。涼子は奇妙な嫉妬心に捉はれた。それにつけても昨夜縁談めいたことを切出して執拗に相手の男を賞めた春枝の口吻に何かはさまつたものがあつたのが想出される。日頃自由放任主義を振廻す春枝の心情が疑はれる。自分の享樂を追ふ一ケの便宜的な主義と思へば思はれる。母として、子として果してどれだけの愛情が取交はされて居る今だらう。涼子は考へるのも怖しくなつて足音を忍ばせ乍ら化粧室を出た。

今迄こそ別に話は交さずとも、激しい愛情を示し合ふ機會はなくとも、お互に母娘であると言ふことだけで安心して居たのだが最近の妙な蟠りは決してそれだけでは安心も出来兼ねる。春枝とて感じないわけではなからうが、鋭く、繊細でしかも我儘な涼子はずつと苦しみも強いわけだ。社交場裡の流暢さを飽迄失はず、機智を弄したり、急所々々にちよいちよいと母の威厳を仄めかして身を守る春枝の遣口は全く腹立しく、又淋しくもある涼子なのだ。

怖れて居たものがこみ上げて来る。涼子は茶の間の長火鉢に片頬ついてうなだれて仕舞つた。黒柿の縁を布巾で撫廻し乍らどう仕様もないのた。母の愛情が濃く疑られ始めて來たのだ。若しや桂子と同様に自分も養女なのではあるまいか、と途徹もない事が冷たい迄に眞剣に考へられて来る。さう言へば、父母共に健全なるに拘らず獨りつ子なること。伯父、叔母達のいづれもが子福者なること。父母共に優しい一方で未だ曾つて折監を受けたことがないこと等が思合されて何だか眞實の様でもある。とあれ世間の親子の如く、専横な親の愛情を知らぬ涼子は確に不幸なのだ。存分に打擲されたら、母の膝に取組つて泣けたら、と幾度か思つたこともある。しかし、春枝は母であると共に常に社交界の一員であると言ふ氣構へを家庭でも失つたことがないから涼子としてはこんなことは空想に類するものなのだ。然し空想は空想としても今の涼子にとつては現實過ぎる程現實の渴望であつた。しかもこの渴望の氣持こそ家出を想ふ時、此の上もない恐怖となるのであつた。

「ぢやあ、行つて参りますから。」

と、仕度を整へた春枝を内玄関に送出し乍らも涼子はまだ奇妙な嫉妬から脱出せなかつた。然し片足踏出して小首を傾

げて振返り、

「あの歸りは多分夕方になりませうけれど、今日あたり徹さんが『小母さあん』つて甘つたれにいらつしやる頃ね、八百七の肉でも焼いたげるといいわね。」

と、出て行く後姿には何處か隙の無い主婦としての心遣ひが見えて、それがたとへ上つ面のことだけにせよお藤の手前氣のひけないのはせめてものであつた。

「まあ、水々しい奥様の御姿ですことねえ。」

「羨しいの。馬鹿ねえ。お前もろくな女ぢやないわよ。」

「あれ、まあ、なにも、あのなन्दございますの。」

「いや、よう。女らしいつて言つてんのよう。」

と、お藤を冷やかす乍らも急に聲を落して、

「それが女だつて、でもねえ。」

聞流したお藤はにやりと笑つて心得顔に、

「あのお嬢様も外出なさるのでは。」

と、奇麗に兩手をついた途端。涼子はさつと顔色を變へて居た。

昨日も外出した。一昨日も、桂子を會社に訪ね、或は街で、公園で。家出について具体的な打合せに熱中して居たことを想ふと、或は小利巧なお藤のことだから……と不安にもなる。

「婦人會の幹事さんぢやあないことよ。」

と、苦しく脱れて、まじくとお藤の血色を伺ふ涼子であつた。

最初の中こそ好奇心もあつて、互に文通し乍ら家出について次第に殖える秘密暗號が嬉しかつたのだが愈々明日だとな

ると先立つのは怖しきだ。家出後の春枝の驚愕や後悔を空想して、悲愴な、幾分甘い感傷に浸り乍ら暮して来た此の一週間余り。反面怖しさも次第に募つて来て居るのであつた。

何の爲めに、何を求めて、と尋ねられても恐らくは自分自身にも明答出来ぬこの家出なのだ。何か止み難いものが引摺出すこの家出なのだ。強ち桂子への邪しき愛欲のためと許りにも言切れない涼子の内心なのだ。然し、それでは？と考へを進めなくなかつた。苦しかつた。はつきり考へ詰めた後の淋しさが怖しかつた。それを想ふと恐怖は募る。

恐怖と言へば此の二三日殆んど絶間なく色々な恐怖感に襲はれ續けて居るのだ。一昨日も、日向の芝生に寝轉んで居る所に桂子の電話を知らせて走つて来たお藤の足音にぎくつ、としたこともある。我にも非ずさつと跳起きて身構へをした權幕には反つてお藤の方が逃腰をつくつて粗忽を詫びた位であつた。これ許りではない。日頃まるで弟の様に可愛がつて居て淋しい時には部屋に連込んで話相手迄させる愛犬ユリーからひよいと跳付かれて魂消た事もあつた。勿論ぞつと背筋を走る冷たいものに、力一杯振飛したのだが、感違ひしたユリーは媚びる様に尾をまわしながら再びじわ／＼すり寄つて来る涼子は殆ど憎惡に近い眼差で、睨みする乍ら、必死になつて突戻すのだが、妙な事には日頃の愛情が全く消え失せて居たわけではなく、恐怖と憎惡の間からちよい／＼現はれて来るのであつた。然しそれはむしろ憎惡に水を掛ける様なもので飽くことのない三歳の獵犬の執拗な跳躍に遂に逆上した涼子は有合せの棒を引摺むや否や力一杯胴に一撃を喰はせたしかし、悲鳴をあげて力無く大舍に逃込むユリーの後姿に、突然日頃の愛情が溜の如く流れ落ちて、思はず涙が溢れ出た。しかも涙の中で狂氣じみた激情に氣付くと、急に抑へても抑へ切れぬ可笑しさがこみ上げて来た。怪訝相なお藤の眼を脱れる爲めに身を翻して二階の自室に馳上つて、いきなりピアノに身を投掛けるなり、きーん、きーんと鍵を叩き乍ら物思ひ——笑ひこけ乍ら物思ひに沈んで行くのであつた。

こんな風に絶えず責められて居るとは言へ、それでも暴風の真中にほんの瞬時、不氣味な風がある様に時折非常に安らかな時があつた。殆ど意識も意識しない位に安らかな時があつた。そんな時に限つて浮び上つて来るのは夕闇に墨繪の様

にほのかに現はれる徹の姿であつた。

それとも氣付ぬ心の中を、消えるともなく消えて逝く。耽るともなく、追ふでもなく。搖曳する幻影に戯れてひそやかなる魂の姿。涙も、笑も凡ての感情は既に塗消され、模糊とした中には色も、音も、時間もなく、寂寥の境ではあるが唯一つ揺らぎ乍ら消え逝く淡い影こそ一抹の不思議な光跡を残去るのだ。幻想は幻想を産んで涼子は全く現實から脱け出すのであつた。

然し乍らこれはいくら思出さうとしても思出せない夢にも似て、再び襲つて来る恐怖の中では捉へる術もなかつた。かうした事を繰返す毎にこの神經衰弱じみた狂想を徹に打明けて見たくなるのだが皮肉屋の徹を想ふといふ腹立しい滑稽さが先立ち、例の意地張りがむく／＼と頭を擡げて来る。

或は徹の皮肉も、自分のこの意地も、抑制された戀心の結果かもしれない。なにしろ幼友達が無遠慮な間柄だから案外眞實の氣持を氣付き得ないのでは……と考へて見るのだが別段徹こそと言ふ氣もない。たとへ兄妹の如き親密さはあつても桂子に對する場合の愛情とは別種のものだ。

お藤が臺所にとつて返した後、式臺に腰を据ゑた儘涼子は没念と考へ込んで居た。

徹に兄妹以上の氣持があるのか、ないのか。ないとつぶやいて居る心が恨めしい。孤兒にも齊しい今の自分にとつて徹こそ良い理解者の筈。それとて愛に渴へた此の懊惱。加之、生活に對する漠とした不満を打明け得ぬことを思へばせうろに身邊の淋しさが募つて来る。今は唯、桂子のみ。たとへ失敗が目に見えて居る家出でも、せめて桂子の幸福を祈る許りだ。自分はどうかうとも、この幸福さうな境遇にあつてこの不幸を懷いて居るよりも不幸な境遇の中で不幸な方がまだしもことだ。と弱々しい氣持にもなる。

かうして家出に對する氣持は更に複雑になると共に唯々現在の宙に迷つた狂ほしい状態から一刻も早く逃げ出せばそれでよいと言ふ全く無氣力な欲望さへも強く現はれる。

格子戸越しに敷詰められた玉砂の冷たい輝きを見詰め乍ら、家出へ、家出へと加速度に昂じて行く心の動きを傍観して居る涼子であつた。

3

「お藤。藤さあん。あのね。」

と、涼子は階段の上から屈んで呼んだ。

「お二階は私が引受けてよ。その代りお掃除が済んだら母様の半巾のお洗濯。煤の來ない所に干さなきあ又お叱言ものよ。知らないわよ。分つ。」

「はい。はい。ちやお肉は——何時頃に。」

「さうね。十一時でいいことよ。厚く大きく切つて貰つて頂戴な。徹さんつたらユリー見たいに喰べちやふわね。」

遠退り行くお藤の屈託のない笑聲を嫉ましく感じ乍ら、南向八疊の自室に歸つて來ると涼子は坐らうともせず部屋の真中に立つた儘だつた。

華やかな外面にも似ず、がらあんとした家中の雰圍氣がまるで此の一部に滲込んでも來る様だ。はた／＼とお藤が使ふ拂塵の音がたまらなく淋しい。此の沈鬱な氣持も今日限りだ。偽の家。逃避の生活も今日限りなのだ、と思ふにつけても明日に迫つて居る家出に悦びと悲しみじみた感傷が絡んで想はれる。涼子は獨りになると急に錯綜した感情に捉はれて何にも手がつかなくなつた。落着けなかつた。其の上、もつと大きな、もつと深い、到底解決出來さうにない不安が心を捉へて瞬時も措かず責め續けて居るのであつた。

生活力も無く、目的も、希望とて更にはない私の家出。きつと失敗するだらう。何の反省もなく決心して仕舞つた私。でも此儘で居たら此の無爲の逃避生活をどうして建直せよう。何時迄経つても盡きない此の謎。この苦悶こそ私の魂迄も腐

らせる悪魔だ。私は若いのだ。清淨なのだ。行詰るだらう。失敗する。でも「若さ」こそ唯一の武器なのだ、と自問自答を繰返し乍らも、余りに抽象的な解答だと情無くもなる。漠として考へて許り居ても始まらぬと叱るにつけても、此の點何の苦もない桂子が羨しかつた。

燃えん許りの希望を家出に、三郎に、京都での自活につないで居る桂子。輝かしい瞳の色を想出すにつけても「眞の幸福」と言ふことが自分だけには縁遠いものに思はれてならない。今迄こそ孤兒で養母と共に貧しくつゝましい生活をやつて居る桂子に對して事毎に優越感とも同情ともつかぬ氣持を持續けて來たにしろ、いざかうなつて見ると既にタイピストとして一年近く試験を積んで居る桂子の前には、自分と言ふものが如何にも弱々しく見えてならなかつた。優越も、同情も單なる環境の紛飾に過ぎなかつたのだ。毫も自分の能力の故では無かつたのだと如實に事實の前に立たされると、一方自分の薄弱な存在が腹立しかつた。恰も宿木の如く、それとさへ意識もしないで生きて來た自分が悔まれる。この不完全極る人間がと情無くなる。而も現在の此の家庭さへ社會的に見れば矢張り一種の宿木的存在であり乍ら、堂々と他を羨む有様を思へばそこに皮肉——が感じられて妙に淋しくもなる。よくも今が今迄恥も疑問も感じないで暮して來たものだと思ふにつけても自分見たいな人間が幾人居て、こんな家庭が幾軒あるか分らぬ現代の社會と言ふものに思ひもかけぬ大きな缺陷と不眞面目さが潜んで居るのがまさしくと目前に浮んで來るのであつた。

腕を挟いて居た涼子は縁側の藤椅子に及び腰に腰けながら何かに縋りつく様な目差を外に向けた。青い空——白い斷雲——濃緑の梢——黒い逞しい幹——萌える芝生。まる汲んでも盡ぬ泉の様に力強く湧出て居る春の目覺めだ。一切の世の中が働いて生きる人で滿されたら、眞實に眞面目な生き方をすればこんな苦惱は消えるだらう。涼子は一分の隙もなく活動力に滿ちて居るこの立体的な風景の中で呆然として居る自分を考へると寂しくなつた。何の解答もないのだ。唯夢の様な事を考へて居るに過ぎないのだ。たとへ凡ての人が働く世の中になつたとて、既に生活力の退化して居る自分には更に苦しい生き方なのだ。而もそれに耐へ得たとしても果して慰めになるかどうかは分つたことではない。縋らうにも縋

るものを知らぬ自分、絶る力さへ持合せない今の自分。涼子は神さへ信じ得ぬ心を思ふと、薔々と深い孤獨感に包まれて狂ほしくなつて來た。同時に家出こそ何かを與へて呉れるに違ひない。何かを擲出さねばならないと言ふ氣持が鮮明に浮出て來るのであつた。

涼子は觀念した亡者の様な足取りで部屋にとつてかへすと押入から旅行鞆を取出して、今更の様に室内の調度を見廻した。

はた／＼と拂塵の音が森閑とした中を續いて居る。

當座の夏物だけは必要でもあるし、又萬一の場合金に代へることも慮つて高價なのを選んで昨日桂子に持出して貰つて居るので準備とてもない。あれこれと身廻りの道具を一通り詰めて仕舞ふと別段これと思ふ品もなかつた。半分にも充たぬ旅行鞆を覗込み乍ら余りに實用的な品物しか入れて居ないのに氣付くと、涼子は思はず微苦笑した。かう云ふ自分ではなかつたに、と思ふにつけても悦ばしく、一方淋しくもあつて何か一つ、二つ位の裝飾品と言へば目頃丹念して蒐めた品々に満ちて居る此の部屋だ。精緻な七寶の花瓶が濫い印度更紗の壁掛の手に置いてあるし、ピアノの上では和蘭陀人形の少年と少女が抱合つて泣いて居る。一方床の違棚の上には優美な博多人形の小女郎が濫い衣裳に結んで垂らした髻の髪縛りも艶めかしく寝をべつて居る。想出のない品とてなかつた。一様に捨難かつた。別れたくなかつた。然し半面一様にさしたる愛着もない。思ひ迷つた眼をそれからそれへとあてどもなくさまよはせて行く中に、ひよいと床柱の上に欄間近く、つくねんと懸つて居る鬼女の面に惹かれた。睨みに睨んで居るそのお面が可笑しく、眺めて居る中に徹の言葉が鬼女の表情から滲出て來る様に想出されて來た。

「怖いお目付きだぜ。知つてるかい。これは瀧の川の紅葉狩にあらはれ出し鬼女にて候、つて奴なんだ。でも何處かにユーモラスな味があるぢやないか。ねえ、何もそんなにあわてるなよ君、つてなところがさ。泥面の安物にしちやあ出來榮えた。」

突然奇妙な有難さがこみ上げて來た。涼子は今迄引緊めて居た口邊をかすかに弛めた。

此のお面は丁度一年前の春、女學校卒業記念の關西旅行に行つた途次の想出の品だ。想へば幼友達で殆んど十年振りに逢つた徹の大人びた恰好に驚いたのもその時だ。春校に連れられて阪神沿線に在る徹の家を訪れた時、馴れつこぢやないかと強いて思はうとしながらも、どうも羞しいと言ふ風な徹の困つた顔付も懐しい。此の度福岡の高等學校に入學した徹も今からは同じ市に住むのだと思ふと改まつた親しみ出て來たあの時。とあれ春の京都を徹に案内して貰つた楽しい一日の行樂は忘れはしない。

二人共、花に浮かれた陽氣な群衆の視線にあつては羞しさが先に立つて妙な氣詰りに固くなつて居た。

「嫌だなあ、どうも、困るなあ。」

と、持余して涼子を見返り乍ら顔を赫らめて居た徹。と、急に突拍子もないことをすつぱり言つたつけ。

「君はシャンだね。小さい時よりも美しくなつてゐる。」

涼子が狼狽して怒つたふりをやつたのは勿論のことだが、これで多少とも氣詰りから救はれて居た。しかし昔乍らの打解け方に返つたと言ふわけではなかつた。表面こそ親密さうに粧つて懐しみ合つては居るものゝ、無理に打解けようとするぞこちなさが自分乍ら可笑しく、その上互に妙に氣取つて居た。嵐山からの歸途、とある人形店に立寄るや否や能面を手取つて掘出物だ等と言つたのも徹の氣取りなのだ。然し、歸りの電車の中で衆目をも憚らず包装を解いて、こゝくと眺め入り乍ら、

「案外いゝお面だ。どうせ福岡に行つたら随分君ん所に御馳走になる積りだからね。御機嫌取りのためにこいつを君に進呈しちやはう。君の部屋にこんなものを懸けとく様な柱はあるかい。」

と、言つた徹の眼差には強ち氣取り許りから貰つたとも受取れぬ節があり、妙に打算的な皮肉な言葉にも拘らず一脈の暖い味がしたのを忘れはしない。

涼子は見るともなく眺めて居る中に急に當時が懐しくなつて來た。鬼女の表情の中に徹が隠れてでも居る様に、懐しくも、愛しくもなつて來た。あの時の氣持こそ眞實ではなかつたか。涼子が新しい氣持でお面を見直した途端ひよいと泛んだのは此頃目に見えて男性的になつて來た徹の体軀だつた。涼子はあわてゝお面から目を外らせた。頬にぱつと血がのぼつた。恥しい、と思ふことは一層恥しい聯想の中に引張り込むのであつた。何も考へられなくなつて來る。嫌、嫌。可笑しいことだ。考へるだけでも。考へちやあいけない、と努力すればする程昂ぶつて來る胸の中。火の様に火照つた頬の感じ以外は何も分らなくなつた。すると、最近時折恐怖の中に現はれて來るあの幻想が今こそ明るい色調と活潑な形相を備へて泛上つて來た。最早あの靜寂境は暴風の中に包まれて居た。溢れる許りの異様な輝きに充ちて、隆々とした徹の姿が追つて來る。涼子は怖れた。笑つた。目を見はつた。

愛しき獸よ我胸に。呪はしき神よ去れ。

愛慕と恐怖の渦の中から涼子の意識がまるでうなされた後の様に極めて徐々に目覺めて來ようとした時、かすかに玄關の開く音が響いて來た。はつ、と我にかへつて立上つた時お藤の聲に絡んで徹の聲がした。

涼子は本能的に床柱に走寄るなりお面に手をかけたが、その瞬間、持出す物に事缺いでこんなお面を、と言ふ稻妻の閃きにも似た躊躇の念にはつ、と手元が狂つた。お面はすぽんとはづれてころりと腕を轉げて落ちるや否やぼつかり割れて仕舞つた。眞二つ。徹の足音がどん／＼のぼつて來る。涼子はがばと面の破片の上につゝぶした。

「やあ、居るかい。小母様は例の如く社會奉仕——おや、どうしたの。ふうん、トランクなど引張り出してさ。何處に旅行するんだろ。」

「……………」

「どうしたつて言ふのさ。氣分轉換のブルデオア旅行つてのかい。拾ひ來るはさゝやかなる戀の愁ひか。はつ／＼／怒つたね。一体何してんのさあ、怒つてるか、泣いてるか、それとも——」

「笑つてんのよう。」

と、必死の笑聲。追詰められた涼子はヒステリックにぐいと顔を上げた。

「おや、そのお面は。」

「割れたわ、落しちやつたわ。」

「へえ、それにしても。ふん、運のないお面だつたなあ。」

「落ちたのよ。割れちやつてよ」

と、がっかり落合ふ瞳と瞳。

「ぢいつと懸けときあ壊れもしなかつたに。」

ちらりと落膽の色を見せた徹は二つになつたお面を拾上げた。お面と共に想出迄も壊された様な。涼子は不安に襲はれた。救を求める様に思はず徹の傍ににじり寄つた。と、かすかに徹の息づきさへ感じられて羞しい。今しがたの幻想を思ふと怖しくなる。だが一度寄せた身体を離すのは更に恥しかつた。何か言ひたい事が胸一杯、渦を巻けば巻く程聲が涸れる。沈黙が続けば續く程不安が募つて来て、それを内心鋭く感じて居るらしい徹の心情が薙と迫つて来る。涼子は突差に噓を吐いた。

「嫌なお面。妙なお面ね。」

しかし身をひくきつけかけは見付からなかつた。

「妙なお面さ。」

ぢいつと身体を固くして居る涼子。鋭く感じて居る徹。互に離れようとする可笑しな努力はぐんぐん心と心を結んで行くに過ぎない。

「想出すね。きつと君だつてもだらう。大悲閣の下で、ほら水遊びをやつてさ。」

「冷たい流れだつたわ。顔を浸して、がぶ／＼飲んであゝ美味しいだつて」

「さうだつたけ。うん、君の半巾で顔を拭いてたら酔拂紳士から寫眞に撮されたし。」

「中學生から冷やかされたわ。」

回想の中では手を握り合ひ

「たつた一つの記念物だつたになあ。泥造りだから、もうどうにも仕方はない。」

と、お面に見入る徹。涼子は遺瀨なく、先刻からともすれば滲出さうな涙を到頭抑へきれなくなつた。想出を懷しんだ余りにか、打明たいこの氣持の故か、それとも／＼と深い孤獨の寂しみからか。安つばい涙だと心を叱り乍らも犇々と迫つて来る悲しい様な嬉しいもの、徹に涙を見られたくはなかつた。

「糊でく／＼けても駄目かしら。」

と言つては見たものゝこれは單なる涙をかくす無意味な言葉だつた。それにも拘らず黙つて傍の机から糊壘を取卸した徹。駄目なことを知り乍ら。無意味な言葉位は知つてゐる癖、黙々としてお面の割目に糊をつけ始める徹の無器用な手付きには何とも言へぬ暖さがあつた。その心情が嬉しくつて、思はず徹の仕草に涙がほろりとこぼれ落ちた。

「泣かなくともいゝんだ。」

かう言はれると一時に涙が奔走り出て、

「割れちやつて、御免なさい、私、私。」

と、徹の膝に泣崩れて仕舞つた。

「お面なんかどうだつていゝさ。僕だつて君が泣いてるのは分つてた。此頃君が何か變つてゐる位知らない僕ぢやあなかつたんだ。でも君は一言も洩さなかつたね。洩して貰ひたかつたさ。だが他人の僕が出る幕ぢやなかつたんだ。お隣りの涼ちゃん、徹ちゃんだつた君だもの。黙つてゝいゝのか悪いのか——小母様が悪いんだ。小母様がこんな君にしたん

だ。」

涼子は嗚咽を嚙殺して、ぐんぐん徹の膝に顔を押しつけた。紺サーチの服地を滲透る涙の滋味が快よく、更に涙を誘出すので涼子は何時迄も泣いて居たかつた。妙なことには春枝の悪口を言はれると徹が憎らしくもなるのだが、最早そんな羞恥心も虚榮心も薄く消えて行くのだつた。身じろきをすまいと膝に力を入れて居る徹だとは知り乍らも涼子は離れたくはなかつた。徹は優しく涼子の肩を撫で乍ら、一語、一語、微塵の皮肉もなく語り續けた。

「實は先の日曜日にね。到頭思切つて君の日記を盗見たのさ。勿論悪いことゝは知つての上だ。でも僕は別に新事實を知つたわけぢやあなかつた。僕の推量が的中したからさ。大部分小母様の責任だ。とは言つてもこれと言ふスキャンダルなどちつともない小母様だもの。社會奉仕とやらの花形だものね。そりやあ却つて君にとつては苦しいことに違ひない。まあ孤兒見たいな今の君さ。桂子さんを手離したかあないだらうさ。然し三郎君は僕の先輩だ。僕だつてあの二人の戀愛は蔭で見守つてたんだ。君があゝの二人を煽動した氣持、惡企みと知り乍ら思止まなかつた氣持を日記でまざぐん見せつけられた時の僕つたら。涼ちゃん。」

ぐつと肩を掴まれて涼子は一入むせび泣いた。だが涼々しい氣持と共に清らかな氣持が湧起つて来る。後悔も、苛責もなかつた。

「涼ちゃん、清算し給へ。誰しも孤獨なのさ。唯、孤獨を孤獨と感じる余裕のない人々が多いだけの話なんだ。パンに追はれてるか、理想を追求めるか、誰だつて何かを求めて生きてるのだ。求めなくちやあやりきれないからさ。而も凡てに絶望、いや極度に自分の力に自信を失つた御連中の爲めには神様つてのが控へてる。ふん、かう言つちやあ御信心家はこわい理窟を捏ねて憤慨なさうがね。」

靜かに髪の中をわけ入つて行く徹の指の觸感に、涼子は甘つたれたくなつて居た。思出した様に吸上げた。最早徹がどんな事を言出さうとも、又言出しても、ちつとも恥かしくはなくなつて居た。

「だのに君は何にも求めては居なかつた。縋らうともしなかつた。その必要もなかつたんだ。だがどうしてその儘過して行けるものか。ね、涼ちゃん。君は自分と言ふものを見詰め過ぎてたね、揚句の果は自分さへ見失つて、無茶苦茶に身近なものを愛しようとしてたね。愛されたい癖に愛しようとしてたんだ。汝いとしき者に相逢ふことなかれさ。強ち別離が苦しいからつてのぢやない。親でも友でも、戀人でさへも、誰一人孤獨でない者は居ないからさ。皆獨りぼっちなんだ。なまじ孤獨に惱むから愛したくなるんだ。愛を求めたくなるんだ。何故もつと自分を可愛がらないんだ。愛情——戀でさへも結局相手を透して自分の孤獨なる姿を見得る一つの愛情に過ぎないんだ。親も、友も、戀人ですら孤獨を映す鏡ではないのだ。それ以上を望むのは自己の破産に他ならない。それ以外の愛情つて奴は打算に過ぎないんだ。涼ちゃん、君はやむを得ず不真面目な生活をやらされて居る許りぢやない。人生を不真面目に眺めて居るんだ。愛情は打算ぢやない。人は決して孤獨から脱出せるものぢやあないんだ。ねえ、素直に心の中を覗いて御覽。何と欲望の多いことよ。何と言ふ打算的愛情の多いことよ。自愛し給へ。眞の愛情へ正しく出發し給へ。孤獨を恥ぢちやあいけない。素直に心の中を眺めるんだ。」

「有難う、有難うよ、微さん。」

「小母様もよくはないさ。今日も亦御外出だね。でもさ。言つてよいことゝ悪いことがあるさうだからね。ふん。まあ、理窟つばい話は止さう。そりやあね生活つてなものへの不安は僕だつて君以上にあるさ。不満なのさ。でも圖々しいつて言はれりやあそれ迄の話。安穩なプチブルの生活に嚙り付いて居たいのが本心なんだ。正しいの、正しくないのつて、ありやあ一ケの仮定を是非する人々の二つの考へ方でしかないんだ。分るもんか。」

「御免なさいな、私、つい取亂しちゃつて。」

と、顔をあげて坐り直す涼子を徹は明るい微笑で包んだ。涙に濡れた手を徹の膝になすりつけ乍ら甘つたれた氣持で笑つたり、嘸上げたりする涼子。亂れた裾を直してやる徹。最早二人は一言も取交す必要はなかつた。言葉よりも、もつと

よい沈黙であつたから。

涼子はにっこり微笑んだ。徹はお面を繼合せて、

「鬼女にて候」

と、つき出して見せた。涼子は子供の様に笑つた。

「さあ、いつもの様にお茶でも飲んで遊ばう。ちやんと君は君らしく構へ込んでさ。」

と、徹も笑ひ乍ら鏡をつきつける。

「まあ、この顔。何時なの——お午、まあホツ、例の御馳走したげるわね。」

と、身輕るく立上つて、階下に降りて行き乍ら、涼子は久振りに明るい、溫い氣持になつて居た。存分に泣いて見ると胸も軽く、徹への氣持もすつきり姿を現はして快かつた。戀と言ふ以上に結縁の深い愛情だと思ふにつけても何だか誇らしく、長い御説教には所々反對したい點があるにも拘らず、その裏に潜んで居た情愛が崇高なものに感じられて此の上もなく慰められて居た。最早徹の男性的な体軀の幻想等は消えて居た。

然し、満ちたりた氣持とは言へ、お藤相手にローズの大切れを焼き乍ら、その肉の香を嗅ぐと、ふいに寂しさがしたひ寄つて來るのであつた。とあれこの寂しさこそは涼子の甘い、清らかな幻想を此の上もなく唆り立てるのであつた。フライパンの上で手際よく裏返す肉片は、まるでこの氣持を祝福する様に、ぢつと甘い音を立てて居た。

だが何處迄も甘い妥協は勿論、生半可な逃避を許さぬ現實だつた。眞赤な血を噴出し乍ら焼けて行く肉の色。迫つて止まぬ強い芳香。涼子の心は見る／＼中に崩れて行つた。抑へても抑へ切れぬ若い血潮が猛然と湧立つた。未だ子供臭い清純さを懂れて居る軟弱な理性が見る間に蹂躪されて仕舞つた。涼子は再び不安とも、恐怖ともつかつぬ苦しい氣持に襲はれて、徹との未來を／＼き乍ら秘かに考へるのであつた。最早働いて生きて行くべき、等と生眞目な人生を考へたくなかつた。たとへ盲目的と嘲る心があつても、遊戲だと罵られても、一途に戀三昧に突進したくなつた。然し、思へば思ふ

程奇妙な不安と恐怖が募つて来る。徹との未来はきつと不幸なのだと思定する反省の氣持が、無條件に現はれて来る。涼子は岐路に立つ受難者の如く思迷つて居た。

焼上つた肉片を皿に盛りながら徹が慕はしく、慕はしくなればなる程、徹が獸の様に思はれて来る。滑らかな皿の表面を擴る血の色が生々しくもぐい／＼心を締めつけて来る。

一方、徹は呆然とした顔付きで、取残された旅行鞆の周りをぐる／＼歩き廻つては幾度もその蓋に手をかけ様として躊躇つて居た。

「徹さあん、降りていらつしやらない。」

徹は思切つて蓋に手をかけた。

「出来ましてよう。」

と、呼びに來さうな甘い聲。

徹は怖れた様に手を引くとむつ／＼り考へ込んで降りて行つた。

4

「へい。十二時五十分、博多驛まれすな。」

「わかつたこと、上り急行つて言つたぢやないの。早く、急いで頂戴。」

「へいきた。年やあとつとるばつてバツカアロ。驛迄やあ一走りらす。」

ふうんと唸つて跳出した自動車。

忽ち白い埃に消込む地行の住宅街。

グリンのアフタマン、ドレスをびつたり身につけた涼子の顔は青ざめて美しかった。

大濠公園がちらりと隠れると舊城の石垣が古濠の上つ面を帶の様にはためき過ぎて、もう賑やかな街だ。

涼子の顔は青ざめて表情が消えて居た。凝然と前方を見詰めた儘何も考へられなかつた。到頭家出したのだと幾度も同じ事を心の中で繰返して居た。

殆ど機械的に脱出して來た涼子なのだ。昨日徹とあんなことがあつた許りに殆ど一睡もしないで悶え疲れたのだ。徹への愛着と桂子への愛欲。生活への不安と不満。逃避か、前進か、突進か。斷末魔の苦に喘ぎ乍ら明した一夜。遂に家出したのか、したくないのか自分でも分らなくなつた涼子であつた。時間の逼迫は意識の喪失を促し、それにつけても「家出」の二字は力強く惹付けて行く。疲れ果て機械的に跳出した今日なのだ。

ぐつと速度を落した車。縣廳、公會堂、橋を渡ると中洲の盛場だ。桂子と、或は徹と共に若さも誇らしく幾度か散歩をやつたこの街。流石に懐しかつた。遂に住馴れた福岡も河の彼方と思ふと振返つて見ずには居られない。と、急に家が戀しく、春枝が、お藤が今頃はどうしてるだらうと此の儘引返したくなる。脱出した時、閉め忘れた玄關の戸が想はれる一方、新生の機到れり。凡ての苦惱の清算は今だ。曉だ。私の曉だと力一杯叫んで居るものがあつた。若い私だ。若さが武器だ。突進だ。と口笛でマーチを吹きたい氣持もある。

とあれこれらの氣持は疲れた揚句、心の表面に泛んで來る聯想じみた散漫な衝動に過ぎなかつたのだ。その證據には驛に近づくに従つて募り行く不安の中からぼつかり現はれて來た春枝の顔に戦いたことなのだ。苛責に苦しみ始めたことなのだ。今頃はきつと愛國婦人會のバザーで戲々として愛嬌を振撒いて居るだらうと思ふにつけても黒お召の紋付姿の春枝の笑顔がまざ／＼と浮んで來る。母様、母様とつぶやき乍ら涼子は大きく開いた瞳をあらぬ方に定めて居た。

ぎ／＼いつと驛の正面に横付けた車。涼子は我を忘れて飛降りた。

一瞬、桂子の顔を、聲を待つて耳をすませたが溢れる許りの雑沓が徒らに冷たく流れ込んで來るだけであつた。涼子群衆の中に馳込んだ。三等待合室、二等待合室、賣店にもホールにも桂子は居なかつた。一時に胸が騒いで、僅許りの落

着きが瞬間に奪はれた。

落着け、落着けと叱り乍ら、涼子はぐる／＼歩廻つた。出来ることなら桂子が来なければよい。歸つて仕舞ひたいとひよい／＼現はれて来る考へにかへつて落着く餘裕をなくしてしまつた。

十二時四十二分。既に改札は始まつて居た。涼子は笑ひたくなつた。泣きたくなつた。正面の廣場に脱れる様に走出した。次から次に急停車で乗付けて来るタクシー。桂子の姿はどれにもなかつた。涼子はぢいつと我慢して運を願つた。

皐月晴れの青空に黄色い廣告氣球が悠然と浮んで居た。涼子は青ざめて大時計を見上げた。
カタリ、と長針が確かに音を立てた。

後六分。

涼子が憑かれた者の足取りで改札口に歩寄つた時、憎々しくも落着拂つた桂子が、それでも足早に現はれて來た。

「まつ、桂子さん、待つた、待つてた。」

「早く、見つかるゝと大變、早く、早く。」

自失した様に立つて居る涼子をぐい／＼引張つてブラットホームの雑沓にまぎれ込むとやつと顔色を和げた桂子だつた。青い顔をほころばせて、

「まあ、よかつた。」

と、つぶやいた桂子の息づきに涼子も氣を取直した。

「何處、何處に居たの。」

「トイレットん中。誰かに見つかりさうで、見つかりさうで。」

「まあ、やつぱり落着いてるわね、私、てつきり——と思つて——。」

「それが落着けないのよ。二日眠れない私よ。苦しかつた。そりやあ苦しかつた。實の母ならつて幾度考へたかしら、

駄目よ。養母な許りにいざとなると氣毒で氣毒で。何つてたつて私を育てた人だもの。でも私は元氣よ。やつちやふわ
 どんなつらい仕事でも頑張るわ。頑張れなきあ白蓮女つて罵られたつて一言もないわけだもの。やつちやふわ。戦ひ抜い
 て見せるから。」

青ざめ乍らも一脈の紅潮を漲らせて言放つ桂子の氣魄を感じるにつけても今更の如く自分の無力が氣掛りになつて来る
 此儘、後戻りしても遅くはないと思つた。漠として考へる許りで何一つ實行しなかつた自分の生活を振返る一方、目前に
 押寄せて來た退引きならぬ實行の世界に慄然と身震ひを禁じ得ぬ涼子であつた。

どうしよう。せめて目的でもある家出ならと焦立つ胸を、恰も嘲笑する様に急行列車が轟然とホームに滑込んで來た。
 騒然と湧立つ人波にもみこまれ乍ら、涼子は泣出したい氣持で車内に押籠められて仕舞つた。

デリ／＼鳴始めた發車のベルがまるで死刑の合圖の様に鳴響いた。

「お別れよ。福岡、福岡、がんばるわ、さらばだわ。」

ぼつ／＼とつぶやいて居る緊張した桂子の聲、安堵の顔。

涼子は恰も引かれ行く小羊の様な哀れさでちいつと車窓にしがみついて居た。眼には何にも見えて居なかつた。紙の様に
 白い顔だ。ベルが止んだ。しづまりかへつた氣味悪さ。涼子ははじかれた様にぐいと立上つた。

「あつ。」

と、叫んだ桂子。走り寄る凄じい足音。ノートを鷲掴みにした徹が風の様に見送人の間を馳け抜けて來たのだ。

涼子は立辣んだ儘大きく瞳を開いた。

無言の三人。徹の荒い息使ひを尻目にかけて汽車が冷たく場内をゆすぶつた。天國の扉から墜ちて行く様にことりと車
 輪が廻つた。

徹は固い表情の中で歪んで笑つた。涼子はほのかに赫らんだ。車輪が廻る。

「當つた。昨日のトランクの豫感だ。何にも言ふことが出来ない。出来なかつた。何故一口僕に——。」

「小母様には都合よく云つとく。金ならあるぞ。桂子さん頼む。涼ちゃん。」

「私、私——。」

「元氣で行くんだ。」

「行つて来るわ、行つて来るわ。」

列車は益々早くなつた。

徹は立止ると右手を振つて、

「涼ちやあん。」

と、叫んだ。

列車は見る／＼ホームを拔出した。徹は兩手を振つて居る。涼子は身を乗出した儘だつた。まるで切れたゴム紐の様に引離された二人だつた。

しかし、何となく明るい氣持を薄く感じて居る涼子なのだ。目的も無く、生活力も持たない癖に、食ふ食はずの人の多い世の中に道樂で飛込むつてのは殘忍極ることさ、と何時かの徹の皮肉がひよいと浮んで來た。それにつけても徹の愛情こそは唯一の自分の安住所ではあるまいかと思はれる。行つて来るわ、行つて来るわ、と、心の中で徹を呼び續け乍らトランクの中の割れたお面を想出して思はず微笑した涼子であつた。

然し、人間の小さな感情など無視してひた走りに走り續ける列車の轟音。何かちぢいつと考へ込んで居る桂子の眉宇を見ると涼子は再び不安に襲はれた。

「桂子さん、到頭やつたわね、自由を吾等にね。曉は今こそよ。」

と、強いて朗らかにならうとする涼子の言葉に淋しく笑ひ返して、

「まだ〜。これからなの。何時迄續くんだけ分つたもんぢやないわ。でもその場その場にちいつと耐へるつもりだ。仕方がないもの。頑張りの一手よ。」

と、答へた桂子の頬は青く澄切つて居た。

嚴然として一步の假借も許さぬ現實を目前に控へて、涼子は打挫かれさうな不安を募らせ始めた。

繪の様なコバルト色の空の下で博多灣が青々と、所々に白波が碎けて居る。列車はひた走りに香椎の濱を突進して居た。遠く見える福岡の市街に眺め入り乍ら、

「お母様。」

と、涼子は低く叫んだ。